

抒情の蕾

私が持つ純情性のすべてを、あなたへと捧げます。

【短歌】

白き追憶

美しき記憶の羽は地に塗れやがて孤独は追憶となる

夜に垂る白き腓のたおやかな歩みに咲くは貴方の華よ

未だ青い春の果実は齧りかけ残滓は褪せぬ言葉となりて

永遠に私の罪は赦されぬ何人も知ることはないから

罪はまたいずれ私の爪となり祈りの叫びは虚構へ消える

残陽が貴方の影の光なら私は俯く向日葵となる

呼吸さえ知らずに消えたあの言葉いつかの嘘は白魚の鰭

水鏡と知りながらなお浮かぶ月掬う掌さえ朧げで

鮮明でありながらも霞ゆく記憶は孤独檸檬のように

喪失を夜の渚へ這わせたら過ぎ去りゆくは白き追憶

海月の夏詩

陽炎のあの夏は今ここにあり嗚呼いつまでも追いかけていた

孤独さえ孤独さえも枯れてゆく夏の記憶は遠くなりけり

斜陽さえ麗らかな影を浮かべるこの町にただただ沈みたい

在りし日の海の記憶にひかり射しやがて染まるは青の郷愁

汐風に流れる音のあたたかさほころぶ笑みは私の願い

人々の温もりさえも忘れていたハイビスカスはあの遠い地へ

潮騒や夏夜の泉にしみとほる我が身たゆたう産湯のごとく

しなやかな息吹感じる風の唄歓喜は波のようにしたたかで

茜引く飛行機雲は彼方へと去りゆく夏の思い出たちよ

追憶は過ぎる時間と抱擁に重なりゆきてうみかぜとなる

いつかまた愛しこの地を訪れる契りの海はあの青空に

抒情の蕾

鮮麗な言葉を蒔いた苗床に詠い芽吹くは抒情の蕾

沈黙は小さな天使の通り道やさしく結ぶその掌に

睡蓮のアルカイックな微笑みに私の肺はうたかたとなる

頬に垂れ呼吸が止まる顎の先天に交わる落日さえも

深閑へ消えた貴方の残香が今も私の中にただよふ

藍色の闇夜へ浮かぶ灯火に月下美人の華はほころぶ

憧憬に沈む心は黄昏へ淡く解けてシユルレアリスム

放課後の時雨が濡らす傘の袖あふれる影は水面に揺れて

燃ゆる雲錆びることなく穏やかな黄昏となれあの追憶に

ノンブレス・オブリージュなど掲げても消えてゆくのは泡沫ばかり

舞い上がり溢れるように散りゆきて落暉に絡む円舞曲の涙

溶けてゆく夜霧のなかへ音もなく月と目が合うその時でさへ

刻まれる自動書記は透明に澄み渡る死を告げる花束

雨を編み重なる影に煙立つ歓喜の飛沫は五色の光

安らかな春眠に就くあなたへと手向ける献花は抒情の華よ

【詩】

白き追憶

追憶の画廊に置かれた小さな瓶
それはかつての

青春が残した果実の残滓

いつの日かを夢見れど

願いはすれ違うこともなく

冬の深閑にて雪割草の花は咲く

もう二度と触れることのできない

薄明に目を細めたら

紫苑の愁眉に私は生きる

瞼を閉じれば

記憶の地平線に陽は沈み

藍空を迸る黒い黄昏が

幽遠な闇夜を描き出す

孤独に俯けば

夜に垂れる仄かな灯

その足跡を辿れば

貴方の白い腓が見えた

たおやかな歩みに咲くは華

それは私の追憶を白く染めてゆく

画廊に散らばる記憶の破片は

かつての青春が犯した過ち

移りゆく時の咆哮に

あのリトグラフは消えてゆく

貴方の影をそこに映して

悴む指先を

夜の渚へ這わせたら

白き追憶が過ぎ去りゆく

月時雨

夜を粧し

雨を纏いて月を冠る

したたり落ちる雫に

幾星霜の歓喜は溶けてゆき

美しき燐光は夜空の華となる

夜を映した水鏡に

シュルレアリスムの玉響を

雨を踏み心は沈む

柔らかに生々しく

深い孤独の安寧と

艶やかに瑞々しく

静寂は雨夜の街を闊歩する

泡沫は夜空を目指す光芒となり

歩みは軽くなるほど

身体は夜に沈みゆく

雨の夜の深海にさえ月影は

降り止まぬ孤独の欠片となる

滲むネオンはまほろばと

雨夜の花火は絢爛に

静寂は夜と絡まり

交わり解けて

やがて消えてゆく

溢れ伝わる呼吸と鼓動

精神は闇夜の闇に淡く揺れ

哀しみはやがて雲を穿つ

黒い尾鰭は儚き残香

透明な掌を重ね合わせ

静寂はいま——月時雨に舞い踊る

幽かなる夜

深く 深く

待ち侘びた夜に

火照る身体を預けては

かろく綻ぶ灯りに触れ

沈んでは潜りゆく

見上げる闇夜の空に

海月を見る

玉響ゆらり独りきり

夜の浮力は沈むほど

私を深く誘う静寂となる

淡く 淡く

祈りは夜雨の泡となり

濡れそぼる前髪から月が溢れる

甘露の雫は艶やかで

煌めき

転がり

弾けて

消える――

月の慟哭は

あの雨花火と重なり

宵の薄膜を揺らしていま

孤独は優しい夜風となる

遠く 遠く

消えかけの光芒に伸ばした手

弧を描くのは妙なる記憶

朧な輪郭の

うつつの鏡に映る

花は美しけれど

微笑むことはない

幽かなる夜は

やがて掌中の星月夜となる

夏の詩

すべてが青空の影となる
虚勢の焦燥は雨垂れに
鳴り止まぬ讚美歌は深山の奥
見上げる貴方は今も過去
朝の香りに
昼の声と夜の顔
清らかな囁りはやがて澱み
甘美な囁きは爛れゆく
追憶色の入道雲に
穏やかなる黄昏を穿てば
すべてが青空の影となる
夏の詩

月夜鳥

待宵の絢爛な風は
天つ空の雲を攫い
鞆韃は歓喜に揺れている
月の光は螺旋を
描くような鋭さで
閑として冷たくまた
憧憬的な悦びを湛える
月夜に浮かれた鳥の声が
また私を夜へ
夜へと誘う独り言
光が消えゆくごとに
翳と灯りは生まれゆく
謳うリズムは夜想曲か
それとも前奏曲にて囁き
また私を追憶へ
追憶へと誘う月夜鳥の詩

doux

穏やかな静寂を――

泣いてばかりはいられないが
それでも孤独の中に雨は満ちてゆく
いくつもの言葉の中から
私を癒してくれる旋律は
僅かばかりの光を放つ
限りなく叫びに近い宣誓を
森の木陰に投げ込み
あとは欲望へと身を委ねた
遥かなるエゴイスト
鳥籠の中に潜んでいる
自由は静寂を奏でている
祈りを込めた虚構に
やがて光はあふれ
名を持たぬ詩人の影すら
うたかたに消し去ることだろう

【小説】

抒情の華

お久しぶりでございます。あなたとお会いするのは、果たしていつ以来でしょうか。

たしかな緊張と、以前よりも強く波打つ不安と歓喜の中、この抒情を伝えるべく私はここへやってまいりました。今回こうして、あなたの元を訪ねることができたのには、いくつかの理由ときっかけがございます。ひとつは、時間の流れが愚かにも罪の意識を薄めてしまったこと。また、もう二度とあなたに会えなくなるのではないかという予感に襲われたこと。それと、私が表現の先に本当に求めるべきものが見つかったこと。そして、あなたの夢を見たことです。しかしここまでしてなお、ふと抱く悪戯心にも似た、突発性の情念に背中を押されなければ、今こうしてあなたの元を訪ねる機会が得られることは、永遠になかったでしょう。……これから訪れる夜は、私の人生においてきつと忘れがたい夜となります。果たして、私の魂は浄化するのか、または束縛されてしまうのかはわかりません。けれど、そのどちらでもよいという気がしております。今宵が訪れるまで、私はあなたへの抒情を連ねたいと思います。しかし、それらが上手くまとまることはおそらくないでしょう。こんなにもとめどなくあふれてしまつては、どうしてそれを正しくまとめられるでしょうか。どうしてそれを、正しく伝えることができるのでしょうか。

あなたにとつて、私という存在がどのような意味を持つのか、今となつてはもうわかりません。ただ忘れ去られた存在かもしれないし、懐かしむ存在かもしれません。または憎むべき存在であるかもしれないし、もしかすると愛すべき存在であつたのかもしれない。それがわからないからこそ、あなたに話すべき言葉もすぐには見つからず、また、この抒情も綺麗にまとまることがないのでしょう。ただひとつ知っていたきたいのは、あなたへとこうしてお話する時間が私にとって何よりも幸福であり、また愛おしいものであるということです。そう、私はこの時をずっと待ち侘びていたはずなのです。けれど、こんなにも哀しい気持ちになるのは、一体どうしたことでしょうか。

あなたにお聞きたいことはそれこそ星の塵ほどつもっておりますが、まず最初にお聞きしておきたいことは、私がこうしてあなたのもとを訪ねることが果たして迷惑ではなかったかということです。きつとお忙しいであろう時期に、突然このように現れたことを、どうかお許しください。それともう一つ。これからも、あなたとこうしてお話をする機会をいただくことができますでしょうか。もしそれが今後叶わないのであれば、これまでに抱えてきました私の想いをすべて言葉に変え、お話ししたいと願うばかりです。けれど、お会いしてからまだ間もないというのに、そうして一方的にお話するのはなんとも不睦なことでありますから、ゆつくりと、少しずつお話しできればと思うのです。

……このように、前置きですらつらつらと助長になってしまふことをどうかご容赦ください。それほどこに、堆積する話は太古の地層のように複雑で、また世界樹の根のように尽きるところを知らぬのでございます。

まずは、私があなたのもとを訪れた目的、それは下心のようなものでもございますが、それを隠しながらあなたとお話することは失礼でありますゆえ、これを先に明かしておきたいのです。――つまり、私はあなたと再び手を結び、たおやかな華となることを望んでおります。以前の、出会った頃のようにとはいかないかもしれませんが、私はそれでもあの美しき日々を追い求め、卑しくも、その続きまでを求めようとしているのでございます。かつての記憶を辿るたび、私の魂は震え、やがてそこに芽が萌ゆるのです。それは茎を伸ばして幹となり、枝を生やし、そして言の葉を大いに繁らせます。私はそれらをひとつ、またひとつと摘み取り、言葉を紡ぐのです。そうして生まれ落ちた詩という名の果实を齧り、その褪せることのない抒情の蕾に、行き場のないあなたへの想いを重ねてまいりました。あなたにしてみれば、長らく忘れていた華の芽が、ふと目の前の地面に現れたようなものかもしれません。けれど、その種は土の中で幾星霜の間、あなたを想い続けていたのです。溢れる言葉に重みが伴うことをどうかお許しください。そして、私の心中を察していただければ幸いです。

やはりどれだけ考え込んでも、何を話せばよいのかという迷いが尽きることはありません。これが最初で最後なのだと、すべてを不器用ながらに伝えればよいのでしょうか。こうして想い連ねる言葉のすべてを滞りなく、何の不快感も伴わずにお伝えすることができれば、どれほど幸せなことでしょう。けれども、私は口が達者ではございませんので、上手く伝えることはできないかもしれません。しかしながら、詩人の独白とはいっても孤独であり、そして思索的であるがゆえにわかりづらいものなのです。あなたが望むなら、何度でもお話したいでしょう。どうか、最後まで私のこの抒情にお付き合ってください。

あなたとの関係が断たれてから月日は流れ、私は詩人のようなものとなっております。かつてあなたは私の青春であり、そのすべてでありました。密やかなる共犯も、絡まり合う依存も、すべてはあなたの呼吸の裏拍において、鮮明に輝いていたのです。若さゆえの中途半端な未熟さや、愚かさ、浅はかさ、無能さたるや。そして、青春の罪と罰を私に刻んだのもやはりあなたでした。そうして、あなたはやがて私の灯火となりました。

私がこの永い暗夜を生きてこられたのは、あなたという灯火があったからこそです。もし、その灯火すらも失ってしまったとしたら、私は一体、どのようにして生きてゆけばよ

いというのでしょうか。……そんな恐怖に怯えながら、私はあなたの歩みに咲く華々を摘み、それを胸になんとか生きてきたのです。睡蓮や椿、菊にダリア。鈴蘭と紫苑、そして勿忘草に夾竹桃……。とてもよい香がいたします。以前に一度だけ、それらの華々から滴る華の汁で、あなたへと宛てた手紙を認めたことがあります。それは元より、送るつもりのない手紙でございました。というのも、詩人のようなものになってからは、何かと想いを書き綴る機会が増えましたが、その抒情はすべてあなたに向けたものでありました。けれども、それらは摘果される幼果のようで、到底あなたへと送ることができない代物ではなかったのです。そして何より、それをあなたの元に届けることは私の罪が許しませんでした。しかし、このような二度と訪れぬかもしれない機会に、あなたへと手向ける抒情詩のみでは飽き足らず、この手紙すらも、私はあなたに伝えたくて仕方がないのでございます。つたない駄文でございますが、どうかご一読ください。

『本日はお日柄も大変よろしく、空はうつすらと澄み、雲はひとつとしてありません。小鳥のさえずりや、春の香があたりに漂い、爽やかな小春日の風が吹いております。あなたの行方を私は知りませぬが、この雲ひとつとしてない青空が、あなたの元へと続いていることを願うばかりでございます。』

未だ咲き満ちぬ桜の花びらが、ひとひらに舞っております。こうして公園におりますと、あの夜、あなたと鞆轡を漕いだ記憶が甦ります。そう、公園に来ると必ずなのです。歳に似合わず無邪気にはしゃぐあなたの影が公園を歩き去りますが、私は決して触れることができません。そのため、鞆轡は揺られることなく、ただ静かに佇むばかりでした。果たして、あなたの追憶の中に私の影は存在しているのでしょうか。

こうして、きつと送ることの叶わぬ手紙をしたためることはひどく滑稽に映るかもしれませんが。独りよがりの、哀しき行為であります。それでも、この想いを自らのうちに捨て去ることなど、どうしてできましようか。そうして、私は本日も、陽だまりの影にて細々と生きております。

きつとあなたは、私のことなどお忘れでしょう。夢に見ることなど、一日として訪れないのでしょうか。このように、想いの文を書き連ねることもきつとないのでしょうか。わかっております。それでも私は、あなたが私の理解者であった日々に追い縋るしかないので。時が流れ、何もかもが変わってしまっていたとしても。例えば、あの夏の夜が嘘であったとしても。私は、あなたのすべてを受け入れる覚悟ができております。

どうか、あなたの……あら、不思議なものです。緑陰のベンチにてこれを綴っておりますが、目の前の陽だまりにシャボン玉がふわりと、ただひとつだけやってきました。周りにシャボンで遊んでいる方はいらっしやいません。どこからともなく、まるで孤独な私の魂のように舞っているのです。私はそのシャボン玉に近づきました。けれど、私の手が届くよりも先に、シャボン玉は地面へと落ちてしまいました。私はそれをただ眺めることしかできませんでした。びいどろのように綺麗なシャボン玉は次第にしぼんでゆき、その鮮やかな色彩を虚にしながら、やがて割れてしまいました。

それはまるで、これから私の魂に訪れるうたかたのようです。もしかすると、名前も知らぬ華というものは、あのようにして咲くかもしれません。それはたしかに、心穏やかでいられるような気がいたしますけれど、自らの魂を地面へと縛り付け、あなたがその路傍へやってくるのをひっそりと待つくらいであれば、私は空をたゆたう胡蝶となり、あなたの肩にて抒情の詩を誦じる夢を見るばかりです。

いつかきつと、この手紙を送りましょう。

あなたへの想いを記した、この手紙を。

願わくば、あなたが私の前に現れることを祈りながら――

』

約十年もの月日が空白となり、そのあいだ私はずっと、追憶の中であなたの影を追いかけておりました。私の罪悪感には長きに渡る時間、私があなたへと近づくことを許そうとはしませんでした。そのため、私はあなたの元を訪れる夢を何度も見ながら、その追憶の中でしかあなたの影を見ることができなかったのです。

かつて、その小さな掌の信頼を失った私にはただ、世の理からの信用のみが残されておりました。あの時、なぜ私はあなたからの信頼に応えようとしなかったのか、その後悔が今も消えません。信用と信頼の違いすら理解できぬほどに私は幼く、そして愚かであったのです。けれど、今となっても何が正解であったのかは、皆目見当が付きません。それは私の欲望が大きすぎるのか、それとも悟性が足りないからなのでしょうか。とにかく、私はただひたすらに未熟で、愚かであったのです。

私はその未熟さから多くの過ちを犯し、多くの心を傷つけてきました。そして私は己を偽り、己自身から逃げてきました。何もかもを捨て去ろうとしました。固くこびりついた殻を破り捨て、新たな航海を目指しました。けれども私は、あなたを忘れることだけではできなかったのです。そう、私は一度、あなたを忘れようとさえしました。それはある一部

においては成功していたのかもしれませんが、この通り、それが完全に達成されることはありませんでした。日常のあらゆるところに、あなたの香が潜んでいるのです。それは残香にも似た艶やかさを持つ、記憶のようなものです。つまり、それほどにあなたは私の世界を支配しており、そして豊かな色彩を飾っていたということです。あなたが私の日常から失われた今も、その残滓はそこかしこに残り、私の追憶を呼び起こしておりました。

苦悩と後悔はありふれていますが、そこに身を浸し続けることは容易ではありません。多くの人々は一刻も早くその浴槽から抜け出し、乾いた砂漠の上にて潤いを求めることでしょう。しかし私は、自らの喪失に向き合い続け、無能で愚かなる自己を蔑み、ようやく美化されていく世界を自らの手で汚し、そしてその喪失に再び沈んでいく……その繰り返しの中でしか、もう生きることができなくなっていました。その輪廻の中にしか、私の求めるあなたは存在しなかったのです。

罪悪感という感情はなんとも辛く、また魅力的な情念であります。罪悪感ほど己の精神を深く抉り、その魂を深層へと誘う力を持つ感情はないでしょう。それは罪の意識によって己の精神を縛り、耐えがたい苦痛から己を守るための防衛本能でもあります。しかしながら、罪悪感はその「罪」と常に一緒ではないということが、その厄介なところなのです。つまり、罪悪感は時と共にその意識を淡く滲ませてゆき、消えてしまいそうになるということ。決して、自らのその「罪」が消えてゆくわけではないのにも関わらず、彼らは私たちの精神から少しずつ離れてしまう。すると、己を縛っていた縄が緩くなったとばかりに、精神はその「罪」から逃れようとするのです。しかし、やはり「罪」が消えることはありません。ゆえに、一時的に解放されたと勘違いした精神は、いずれ再びその「罪」と対面し、さらに深い罪悪感を己の魂に刻んでしまうのです。これが輪廻のごとく繰り返されることは、生物としてなんと美しく、また素晴らしきものであるのかと感じると共に、その終わりのない業に、途方もない畏怖を覚えます。

いつかこのまま罪を忘れて、あなたのことすら追憶の彼方に褪せてしまうのではないか、そんな恐怖が私を襲いました。そのために私は、あなたと再び逢える日を望み、そしてこの手紙を綴ったのです。しかしそれはまた、その罪から逃れようとしているだけであつたのかもしれない。私にはきつと、あなたをもう一度傷つける覚悟がありませんでした。そのために私の罪はより深く刻まれ、罰は永久となってしまったのでしょうか。世界とはなんと残酷であり、また清らかで正しいのです。

この手紙を読んであなたが何を思うのかは分かりません。何かよろしくない影響を与え

てしまうのではないか、という一抹の不安もあります。しかしながら、あなたに対する私の想いが少しでも伝わっていれば、この上ない幸せを感じるものでございます。そして、あのかぐわしい抒情の華々の香が、あなたを優しく包んでいることを祈るばかりです。

ひとつ、とある旅のお話をいたしましょう。

それは失われたあなたの言葉を探す、「追憶の旅」です。

かつてあなたから贈られた言葉は私にとって鮮麗な果実でした。その実から滴る美酒のように甘美な雫を、私は少しずつ、少しずつ、大切にいただいております。一気に呑み込んでしまうのはなんとも惜しく、齧りつくことなど到底できなかったのです。けれど、言葉とは生もののごとく足が早いものです。気づくと、掌中の果実はすでにその瑞々しさを失い、色褪せたドライフラワーのように、その身体をしぼませてしまいました。あの甘美な雫が垂れることはもうなく、今さら齧ったところで、その果肉はすでに失われておりました。ただそこにあったのは、どこまでも空虚な苦味ばかりでした。私は再び、あの言葉の果実、そこから得られる美しくも抒情的な美酒を求め、そして旅に出たのです。

旅の中で私は、その旅路の傍に落ちている様々な言葉を拾い、そつと口に運んでゆきます。けれどもやはり、たいていの場合には身体が拒絶し、私は嗚咽と共にそれを口から溢してしまふのです。そんなことを何度も繰り返しながら、私は旅を続けました。時折、言葉がすうつと身体の中に溶け込んでゆき、心がなんとも晴れやかになる時があります。その快楽は麻薬的であり、時に真理的です。重要なことは、道端に落ちているような言葉を選んで探すということです。ショーウィンドウに陳列されているものや、蜜蜂が群がっているようなものはあまり好ましくありません。なぜなら、それらはただ心地がよいだけで、魂に訴えかけるような抒情を持ち合わせていないからです。例えるなら耳触りのよいラジオのようで、決して、心の奥底を蝕む苦しみを決り出すような言葉を放つことはないのです。私が欲しいのはただ、あなたを想起させるような、褪せることのない抒情です。それは時に自虐的な諧謔性を浮かべるかもしれませんが、またプラトニックな官能を持ち合わせているのかもしれませんが、必ずしも、美しく綺麗なもののばかりではないでしょう。決まっていたしかなことは、その抒情からは腐敗した檸檬にメランコリーとノスタルジックを混ぜ合わせたような、醴えた香がするのです。そのどこか懐かしいような香がしました時、私はそつと後ろを振り向きます。

ご覧ください。先ほどの吐瀉物から、抒情の芽が――。

さもありなん

それは不意であり、また突然でもあります

——（喪失）

懐には華と交差点と石ころを

追憶の中でそれを天に掲げれば

それは天つ空のびいどろとなり

穏やかな静寂の光を浮かべます

そのびいどろを口へと運び

カラコロと舌で転がせば

実に豊かたで官能的な

抒情の味がいたします

・
・
・

（以下、喪失）

——これは夢の前、旅宿の寢床にて私の枕元へ訪れた、とある詩の精霊が誦じた一節であります。私はその声が聞こえました時、すぐに筆を取ってその詩を書き残さねばと、布団から起きあがろうとしました。けれど、焦る私を詩の精霊が諫めます。曰く、『この詩は書き記すことを許さない代わりに、とても甘美で抒情的な詩を奏でるのです。あなたはそれを聞いてみたくはありませんか。続きを末まで詠んでみたくはありませんか』

そう語りかけてくるのです。私は床から立つのを諦め、その詩へと身を任せることに決めました。そして、先のソネットにも似たような詩が始まりました。しかしこれらはそのすべてではなく、私の記憶に明くる朝まで残っていた残滓に過ぎません。この詩の続きはたしかにあり、それはもう素晴らしき詩であることに間違いはないのですが、今となってはもう何も残らないのです。惜しいことをした、やはり書き残すべきであった……そんな後悔が残りますが、しかし、失うことがなければあの詩を最後まで詠うことは叶わなかつ

たのだと思うと、仕方のないことだとも思えました。それほどに、あの詩は甘美で抒情的だったのです。

夢現つの中、あの詩がどのようなことを意味していたのかは判然としませんが、その後見た夢の中にあなたが出てきたことと何か関係があると思えてなりません。そうであるのなら、やはり惜しいことをしてしまいました。もしもあの詩が私の掌中に残っておりまして、夜ごとその詩を詠んでは、夢の中のあなたへと逢いにゆくことができましたのに！……けれどもそう、私はわかっております。それができないからこそ、あなたは私の夢に出てくるのであり、あの詩は「詩」としての輪郭を留めるのだと。

そのために私は、いつも静かな喪失の中で白々とした朝を迎えるのです。穏やかな希死念慮は優しい香をほのかに浮かべながら、私の周りを蕭雨のように漂っておりまして。

「きっと誰かが、私をそつと殺してくれるのでしょう」

そんなことを、雨音の合間に囁きます。ペトリコールは朗らかな香を纏い、それはあなたの香によく似ていました。私は願います。もう一度、あなたの香に包まれることができたら。私は喜びと哀しみの中で深く永い眠りにつくことができるでしょう。あなたの香に涙はあふれ、それははやがて夜の渚となるのです。もう一度、もう一度その香に包まれることができたのなら、私はあなたという華をそつと優しく、けれども強く抱きしめることができるのかもしれませんが。そうして私の命が終わりへと向かう頃、何よりも大切な一節を淡く滲ませて、あの詩のように儚く消えてしまうのでしょうか。けれど、それでよいのです。だからこそ、この魂はいまもこうしてここに在るのですから。

旅先で見たあの夢はどこまでも幸せで、けれど、それが私を苦しめます。その夢の中ではこのような声がしきりに聴こえておりました。「——何を求めて、何を求めて」と。私はやはり、あなたと共に歩む未来を望むのです。そして私は、あなたのことをもっと知りたいと願いました。これまでにあなたは一体何をして、何を見て、何を語ってきたのでしょうか。そして、あなたは何を生み出してきたのでしょうか。あなたの作品をもっと知りたい。この手で触れてみたい。ただ、私の知らないあなたを知り、そして理解したいと強く願うのです。けれど、臆病であった私はただそれを祈るばかりでした。そうして、うたかたの日々は消えてゆくのです。きっと、あなた以外の華を胸に抱きながら生きる夢を見ることはないでしょう。いつもそこにはあなたがいて、私はその影を見つめているのです。たとえ気づくのが遅すぎたとしても、私はあなたを望みたい。いえ、望み続けなければならぬのです。生涯、あなたよりも素敵な魂と出会うことはきっとないのですから。

旅の中で見た夢の一つ、たったそれだけで想いはここまであふれ、何もかもを受け入れる覚悟ができてしまうのです。喪失も、哀しみも、後悔も、罪悪も。すべてを優しく受け入れ、私はあなたの詩を綴りましょう。この想いを遠く届けるために。そして、この想いを弔うために。けれども、そんな幸せを求めることが、いったい私に許されるのでしょうか。それとも、許すことができるのでしょうか。私の生きる意味はきつと、ここにある。

その確信のみが私を追憶へと動かし、その旅の中で、あなたの影を探し続けたのです。

そうして、その旅の果てにてついに、私はあの言葉の果実を見つけました。それは、孤独に潜む記憶のような形をした檸檬でした。艶やかで眩い光を放ち、まだ青い果実のような酸味を湛えながら、あの饅えた独特の芳香を放っているのです。私はその檸檬を手に取り、あなたの追憶から滴る甘露をそっと舐めます。檸檬は次第にしほみゆき、やがて爽やかな死香を放ち始めます。それは清らかであり、また嫉妬にも似た香ばしい情念を帯びております。それは、追憶の香りです。檸檬の柔らかさは命の脆さのようであり、魂の儚さでもあります。私はその檸檬へ貪るような激しい接吻をしたくなる衝動に駆られるのです。そして、その口づけには抒情という焦げ跡が残りました。

もしも私の魂がこの美しく、そして抒情的な檸檬で在ることができたなら。それはふいに転がり落ちてあなたの足元へ転がります。あなたはその檸檬を拾い上げ、そっとその香りを感じることでしょう。そうすれば、私の魂は腐りゆくことなく永遠の白き追憶へと、その身体を溶け込ませてゆくことができるのかもしれない。

あなたはふいに、その手にした檸檬へほろ苦い懐かしさを覚えます。そして、ある作画的な扇動によって感情が込み上げられ、その手に掴んだ檸檬を空へと投げ捨てます。檸檬は宙を舞い、そして音もなく爆散して消えてゆくのです。その爽やかな死香と、鮮やかな色彩を追憶の中に撒き散らしながら――。

私が詩という表現の先に何を求めているのか、それはつまり、あなたという灯火を求め、そして喪失することです。かつての私には、あなたのために生きること、そのすべてを捧げる覚悟がありませんでした。ただ臆病で、どこまでも中途半端だったのです。今となってはもう、悔恨や名残惜しむことすら手遅れなのかもしれません。もし、たとえそうであったとしても、その覚悟をいま、ここで。何もかもを受け入れ、私は――。

私が持つ純情性のすべてを、あなたへと捧げます。

まるで蕭雨の晴れ間のように、身体は濡れそぼりながらも晴れやかな気持ちです。なぜなら、あなたへ逢いにゆけるということがこんなにも嬉しく、また哀しいことはないからでございます。きっと、あなたと訣別することのなかった幸せな日々も、それはまたそれでよかったのかもしれませんが。けれど、私はいまこうして、この抒情を連ねることができたということに、深い幸福を感じております。

もしも再び、あなたと肩を並べることが許されるなら。失ってしまった日々、その長くも刹那の時間を、少しずつ取り戻しましょう。お互いのことを語らいながら、新たな日々をひとつひとつ重ねてゆきましょう。

あなたは言います。「これは私が天の川に入って初めて完成させた絵なんです。こっちは、深い森の中で個展を開いた時の絵。それで、これが海の底の――」私は言います。

「ええ、よく知っております。私の胸で枯れてゆく華々が、その便りを綴ってくれましたから。枯れた華はやがて詩となりました。私の詩は、すべてあなたのための詩でありました。けれど、あなたの絵に私の影が映っていたことはきつとないでしょう。それでも、私の詩には、常にあなたの影がございました」また、あなたは言います。「それでは、私がかれより描く絵にはすべて、あなたの瞳を映しましょう。どうか、その瞳に煌めく宇宙を、自然を、光を、詩を、私にも見せていただけませんか」私は答えます。「ええ、これからはきつと、私のためではなく、あなたのためにこの詩を捧げることでしょう。いつか、二人の抒情が重なり、新たな命となることを祈りながら――」

そうして、摘み上げた抒情の華々に二人で寝転び、過去や現在、そして未来を、あなたと同じ目線で思い描くことができる、そんな日々を――。

もしもそれが叶わぬのなら、独り転がる私の身体に月桂樹の葉を乗せ、朗らかに焼き尽くしてください。燃ゆる華々は死化粧の美しさを持って繊麗に映え、散らばる白き灰は、華の送り灯に照らされて燦々と輝きます。そして、漂う香はやがて私の魂の輪郭となり、ゆらりと消えてゆくことでしょう。

それきりでございます。

このような詩も、願ひも、抒情すらも。それきりなのでございます。